（別紙１）

論文の内容の要旨

論文題目　古典インド思想における文と行為の理論
　　　　　　――『シュローカヴァールッティカ』「文論題」研究――
氏名　　　藤井 隆道

本研究の主題は，インドにおける聖典解釈学の伝統である古典ミーマーンサー学における，文についての言語理論の成立である．ミーマーンサー学の文理論は従来，「abhihitānvaya 説」と「anvitābhidhāna 説」という二つの学説の対立を軸に論じられることが多かったが，本論ではこうした整理が進む以前の学説形成の過程を明らかにすることを試みる．そのために主資料として選んだのは，七世紀に活躍し，以後のインド思想の展開に決定的な影響を与えたミーマーンサー学者クマーリラ・バッタの著作『シュローカヴァールッティカ』の「文論題」と呼ばれる一章である．このテキストは，文法学，そしてミーマーンサー学というインドの言語分析の伝統において蓄積された知見を踏まえて，動詞や名詞といった語の種別を前提とし，それらの間になりたつ統語的関係について詳細に論じるなど，極めてユニークな内容を持っている．いくつかの優れた先行研究が発表されているが，その解明は部分的なものにとどまり，また思想研究の前提となる出版テキストの状態も決して望ましくない．本論では，写本と未出版の注釈を用いてテキスト校訂を行い，訳注を作成して「文論題」の全体像を明らかにするとともに，その思想史的な位置づけを明確化することを目指した．本論は，議論分析を与える思想史研究である第 I 部（第 1 章，第 2 章，第 3 章）と，原典研究である第 II 部（第 4 章，第 5 章）に分かれる．以下その章立てに沿って概要を示す．

第 1 章では，本論の主題を提示したうえで，ミーマーンサー学という学問体系，そしてその思想伝統に属するクマーリラという思想家とその著作『シュローカヴァールッティカ』，またその一章である「文論題」などについて必要な情報を整理した．

第 2 章で論じたのは，古典ミーマーンサー学において文に関する体系的な理論が説かれるようになった理由である．ミーマーンサー学の体系で，「文論題」（JS 1.1.24–26）は，ヴェーダ聖典の規定文の権威確立を主題とする「タルカパーダ」（JS 1.1）の後半に位置する．そこで『ジャイミニスートラ』（JS）に対する現存最古の注釈，シャバラ・スヴァーミン著『シャーバラバーシュヤ』で，「文論題」に至るまでの「タルカパーダ」の議論を辿り直すことにより，聖典権威を問題とするなかで，いかにして文という主題が導入されるのかを明らかにした．

『シャーバラバーシュヤ』では，「自律真理説」と「言葉と意味との関係の本源性」とを主要な論拠としてヴェーダの権威が導かれる．言葉は自らの意味と本来的に結びついていて，その関係を通じて意味理解が生じるが，特に聖典の語から生じた知識は反証されることがなく，その内容は真とみなされるというのがその論証の趣旨である．シャバラはその論証の過程で，JS 1.1.3–5 に対して，自身の解釈とは別に「ヴリッティカーラ」と呼ばれる先師の長い注釈を提示する．シャバラ自身が，彼の議論の強い影響を受けているが，両者の議論の枠組みは知覚と聖典の関係をめぐって大きく異なっている．シャバラは知覚と聖典を対比し，知覚により到達できない領域について聖典が

情報を与えるものだという事実を重視するのに対して，ヴリッティカーラは，聖典知が端的な知覚と同じように真であるというように両者を類比的に捉えて，知識一般の性質を問う開かれた問題意識のなかで聖典権威を確立してゆく．

言葉と意味との本源的関係からヴェーダの真理性を導く論理は，ヴリッティカーラにより次のように示されている．言葉と意味との結びつきは，人格存在に作られたものではなく本来的なものである．それゆえに聞き手は，話し手や聞き手自身の人為的作為に依存することなく，言葉そのものから意味を理解する．特に作者のいないヴェーダの語から得られる知識は，知覚にも比すべき真理性を帯びたものと考えられるのである．しかしここに問題がある．ミーマーンサー学で，意味と本源的な関係を持つ言葉とは単語のことである．したがって単語の意味理解が，人為性の介入に由来する錯誤を免れたものであるとしても，このことはヴェーダから知られる事柄の真理性を保証しない．ヴェーダは文により行為を教示するのであり，また文についてこそ真偽は問題とされる．したがって文の意味理解がいかなる根拠を持つのかが問われることになる．そのなかで特に懸念されるのは聞き手の側における人為性の混入である．文を聞いた人に恣意的な構想に基づいて意味理解が成立するということを否定するために，文の意味理解がいかに成立するのかについての体系的な説明が求められる．この問いに対して「文論題」は開始されるのである．

第 3 章では『シュローカヴァールッティカ』「文論題」の分析を行ったが，議論の詳細は第 5 章の訳注研究により示されるので，個々の議論のなかで提起される問題の思想史的な位置づけや文脈的な意義を明らかにすることを主眼とした．

『シュローカヴァールッティカ』「文論題」の前主張者（反論者）による立論の大部分では，複数の意味要素間に成り立つ関係が文の意味であるという観点を基礎にして，文法学の伝統で発達した限定関係としての文の意味，あるいは因果的過程としての文の意味というアイデアを踏まえて論述がなされるので，文法書『マハーバーシュヤ』などの関連箇所を参照し，議論の前提を明らかにした．「文論題」前主張者は，文法学とミーマーンサー学の伝統で提示された意味論的・統語論的な知識を駆使しつつ，例文を用いて単語の意味間の関係が文の意味として理解されるかどうかを問い，それに合理的な説明が与えられないことを興味深い仕方で論じてゆく．結果として導かれる結論は次のようなものである．文の意味は，言葉が語ることではなく聞き手が構想する人為的なものであり，たとえ言葉（単語）と意味との関係が本源的であるとしても，それを根拠にしてヴェーダの権威を確立する議論は成り立たない．

この反論をうけた「文論題」確定見解部で，クマーリラはまず前主張者の批判に直接答えるのではなく，文全体が文の意味を表示するという論者（「文論者」）の論駁から開始する．この対論での文論者による議論・論点のほとんどは，クマーリラに先行する文法学者バルトリハリが提示したものであるので，彼の主著『ヴァーキャパディーヤ』の関連箇所を参照し，さらに『マハーバーシュヤ』などに議論の系譜を辿って個々の議論の思想史的な位置づけを明らかにした．

文論者との対論を通じてクマーリラは，文中で単語が確固たる意味を保持するという主張を導く．それら諸単語の意味に基づいて文の意味が理解される．この主張はシャバラから受け継がれたものであるが，クマーリラはさらに，バーヴァナー説を基礎として文の意味理解が成立する仕方をより具体的に解説する．つまり動詞はバーヴァナー＝〈生ぜしめること〉を意味するが，このバー

ヴァナーから期待（syntactic expectancy）が広がり，〈実現対象〉，〈実現手段〉，〈執行細目〉という三要件とのあいだに関係が成立する．このバーヴァナーとその三要件の関係が，文の意味の主構造である．文はおおよそ，ある主体が何か（実現手段）により何か（実現対象）を引き起こすことを表現するのである．

バーヴァナー説そのものは，シャバラのテキストにも明瞭に認められる．しかし彼はこの主張を，あくまで祭式行為を命じるヴェーダの規定文解釈のなかで提示するのであり，「文論題」においても，バーヴァナーや行為の概念に言及することはない．一方でクマーリラは動詞の一般的な意味論としてバーヴァナー説を提示する．また彼によるならば，同格構文における意味間の関係や，カーラカと行為の関係など種々の統語的関係は，バーヴァナーと三要件の関係のなかに収まる．クマーリラは，聖典解釈上の分析概念であったバーヴァナーを基礎として，あらゆる種類の文に適用可能な一般理論を提示することを試みている．

生じること（バーヴァ），すなわち実現することを，文の中心となる動詞の意味論に組み込むことにより，文の意味を一種の因果的過程（causal process）として捉えるアイデアは，文法学とミーマーンサー学に共通している．しかし文法学では，諸カーラカ（行為実現要素）が協働して実現されるものが行為である．一方でミーマーンサー学では，何かを実現することが，行為すなわちバーヴァナーである．またバーヴァナーの概念は，文中の一つの意味要素というのに留まらず，統語論的な含意も併せ持っている．動詞表現はバーヴァナーを表示することにより，文の意味構造全体を規定する．前主張部で提起された，単語の意味間の関係についての理解が成立しないという批判に対しては，このバーヴァナーを中心とした文の意味構造というアイデアによって回答が与えられている．クマーリラは文法学の議論の影響を受けつつ，祭式をめぐる思索を通じて得られた人間の意図的行為に対する洞察から，文についての言語理論を導いたのである．

第 4 章では「文論題」校訂テキストを提示した．『シュローカヴァールッティカ』「文論題」の出版テキストはいずれも，詳細な分析を与えるうえで望ましい状態にはない．そこで主要な版本に加えて，新たに写本を三本と，未出版の重要な注釈『カーシカー』などを用いて校訂テキストを作成した．

第 5 章では，この校訂テキストを踏まえて日本語の訳注を作成した．

『シュローカヴァールッティカ』の「文論題」に対する現存する最古の注釈であるスチャリタミシュラ著の『カーシカー』は，「文論題」について未出版である．そのトランスクリプトを一本利用した暫定的テキストを Appendix として付した．